【小6】国語 文章問題　説明文 1

月　日 名前　　／100点

つぎの文章を読んで、後の問題に答えましょう。

「ふつうはこうするよね。」わたしたちは、この言葉を何気なく使っています。しかし、その「ふつう」は、本当にだれにとっても同じものなのでしょうか。

たとえば、目玉焼きに何をかけて食べるかを、友だちにたずねてみてください。しょうゆと答える人もいれば、塩だと言う人、ソースでなければいやだと言う人もいるはずです。それぞれが、自分の家で当たり前だった食べ方を「ふつう」だと思っているのです。

つまり、「ふつう」とは、みんなに共通する決まりではなく、その人がこれまでに見聞きしてきたことの積み重ねから生まれた感覚だと言えます。育った家や地域、出会ってきた人がちがえば、「ふつう」がちがうのは当然のことです。

問題になるのは、自分の「ふつう」を相手にもおしつけてしまうときです。「ふつうはこうでしょう。」という言い方には、そうしない相手をおかしいと決めつけるひびきがあります。言われた側は、自分が大切にしてきたやり方を否定されたように感じるかもしれません。

では、どうすればよいのでしょうか。大切なのは、自分の「ふつう」を、たくさんある「ふつう」の一つだと知っておくことです。そう考えれば、自分とちがうやり方に出会ったとき、「おかしい」ではなく「おもしろい」と感じられるようになります。ちがいは、自分の世界を広げてくれる入り口にもなるのです。

（この問題のための書き下ろし）

問一　筆者は、「ふつう」とはどんなものだと言っていますか。「～から生まれた感覚」につづくように、本文から三十字までで書きぬきましょう。

問二　目玉焼きの例は、何を説明するために挙げられていますか。いちばんあうものを、ア～ウから一つえらびましょう。

ア　目玉焼きには、しょうゆをかけるのがいちばんよいこと。
イ　家で食べる料理は、どこの家でも同じだということ。
ウ　人によって、「ふつう」だと思っているものがちがうこと。

問三　筆者が、自分の「ふつう」を相手におしつけることを問題だと考えるのはなぜですか。四十五字までで書きましょう。

問四　この文章で筆者がいちばん言いたいことは何ですか。いちばんあうものを、ア～ウから一つえらびましょう。

ア　みんなが同じ「ふつう」を持つように、決まりを作るべきだ。
イ　自分の「ふつう」を一つの考え方だと知っておけば、ちがいをおもしろいと感じられる。
ウ　自分の「ふつう」は、人に言わないほうがよい。